

ARCADIA

OKAZAKI CITY MUSEUM NEWS



103
SUMMER
2025

岡崎市美術博物館ニュース〈アルカディア〉

子^ねの所縁^{ゆかり} なかび

特任館長 榊原 悟

（承前）となると前掲の乗全^{のりや}『大黒天』三図①②③の制作についても、改めて乗全の転変する人生の中に置いて検討する必要があるのではないか。そこで①の自画讃『大黒天図』（前回の図2）。これについては既に、

- ・還暦の歳の作であること
- ・しかし描いたのは、その歳の初秋甲子^{きのね}＝七月二十七日であること
- ・であるならば本図制作の動機は、必ずしも還暦を祝うためだけにあってはならないこと

・となると制作の動機は、この日が甲子である一点を第一と考えるべきこと

・描いたのが「大黒天図」であるのも、それ故とみられること

などが明らかにになった。しかし、甲子に対するこだわりが制作の背景にあったとすれば、ここまで指摘しなかったが、どうして七月二十七日に描くに至ったのか、改めて問題とせざるを得まい。と云えば少なからぬ読者はお気付きに違いない。そう、甲子の日は、いや甲子だけではない、同じ干支の日は、閏月の有無で変わるものの、年間六回前後はあるはず。現に嘉永七年には、閏七月があったため、甲子の日は、正月二十四日、三月二十五日、五月二十六日、七月二十七日、八月二十八日、十月二十九日、十二月三十日の都合七回を数える。となると、もし還暦にちなみ、その甲子の日に「大黒天図」を描こうとするならば、常識的には還暦を迎えた最初の甲子の日、すなわち正月二十四日を当てるのではなかったか。

だが①を描いたのは七月二十七日。この一事だけでも①の制作の直接的動機が還暦祝賀のためとみるのは難しい。では、数ある甲子の日のうち、描いたのがどうして七月二十七日であった、と云うより、あらねばならなかったのか。しかし、現在までに報告された乗全年譜（松平乗承^{のりや}著『乗全年譜草稿』ほか、前掲「大給松平氏と西尾藩」図録など）では、乗全に、特に七月二十七日を特別視させるような伝記的事実はない。であるならば、七月二十七日揮毫はやはり偶然、偶発的要因によると見るほかない。

では、その偶発的要因とは、何であったのか。

わたしは、乗全が大黒天の夢をみたことではないか、と考えている。と述べるのではなく、そんな推測は飛躍のし過ぎで、それではもはや推測と云うより妄想に過ぎないのではないか。仮にそうであるにしても、それを証左する文字資料はあるのか。

当然の詰問である。だが残念ながら現時点で、それはない。しかし三点の画像資料があるではないか。前掲した三幅の『大黒天図』①②③である。いや、三幅だけではない。他にも相当数の「大黒天図」を描いていた、と云えば、

―所詮、殿さまのお絵描きだ。面倒な彩色を伴わない、水墨の画法のみでも描ける「大黒天図」であってみれば、得意の画題として、求められ、ば苦もなく描いたのではないか、やっぱり一画題限定の趣味芸だ、と。

確かにその一面はあったかも知れない。しかし乗全の画技は素人芸を大きく越えるもので、祖父乗完^{のりや}（大給松平家十二代 酒井抱一の叔父 一七五二～一七九三）と交流のあった南蘋派^{なんぴん}の絵師宋紫石^{そうむらたけ}（一七一五～一七八六）の画譜『古今画藪^{ここんがく}後八種^{ごはっしゅ}四体譜^{したいふ}』（安永八年・一七七九刊）などを学ぶ本格的なものであった（榊原悟「殿さまのお絵描き」『大鎖国展―江戸に咲いた異国の花』図録 二〇一六年）。

そんな乗全の画技を知るのに、まことに都合よい展覧会があった。「第一回西尾町史料展覧会」と銘打たれた展示である（その折の『列品目録』が遺る。西尾市岩瀬文庫蔵 以下の記述はすべてそれによる）。会場は、西尾尋常高等小学校増築校舎、わたしの母校だ。しかし開催されたのが大正三年（一九一四）二月と聞けば、当時の西尾町にあっては、展覧会と云うより、もう事件ではなかったか。近代化が進むなか、日本各地の市町村で、こうした催しがあったのか否か、西尾独自の試みであったのか、それ自体興味ある問題だが、そこで展示されたのは、西尾藩を長期に亘^{わた}って治めた譜代の名門大給松平家歴代の書画類であった。その多くは町内の所蔵家からの出品。殿さまからの拝領の品として大切にされてきたのだろう。ご維新以後も江戸が生きていた。しかし、そうであればこそ今回の企てが実現し、あまつさえその折の『列品目録』さえ大切な記録として遺したのだろう。そんな価値観、共通認識が、やがて岩瀬文庫と云う稀代の収書事業を思い立たせたのではなかったか。まさしく西尾の文化的土壌の豊かさだ。自分たちに不都合な公文書、記録類は常に黒塗りか廃棄、昨今の惨状は、もうタメ息をついている場合ではない。

なかで展示された乗全の書画は、幕末の殿さまであったためか遺品が多く、二十五幅に及ぶ。和歌書き一幅以外はすべて画幅。お絵描きを趣味とした、いかにも乗全らしい。しかも描いた画題は仏画に道釈人物画、物語絵、花鳥画など多岐に亘る。着色画も多く、これだけの画題を描きこなしたとなれば、乗全の画技が、殿さまの趣味、素人絵師の域を超えていた、とみることに無理はない。

となると改めて気になるのは、山水画が全く無いのと、「大黒天図」の四幅である。展示品と云う限られた範囲ながら、と云うより範囲であればこそ、この数字は注目に値する。ことに後者の四幅は異例。前者すなわち山水画ゼロが乗全の好みの反映と云うなら、それでもなお「大黒天図」が四幅もあるのは、乗全のこの画題に対するこだわりの結果以外の何ものではあるまい。

では、そのこだわりとは―それを考えるための手がかりともなる歌が遺されていた。乗全の侍医羽生水安（一八二九―一九〇五）が、万延元年（一八六〇）その職に撰挙された折の同年十一月十一日、乗全が水安の願いに応じて描いた、それこそ「大黒天図」に自ら寄せた歌である。実は羽生家には乗全「大黒天図」が既にあつたようで―むろん拝領の品だろうが、安政二年（一八五五）十月の、いわゆる安政の江戸大地震に伴う火災で失ったため、爾来、再度の揮毫と拝領を願っていたところ、ようやく叶ったと云う次第（以上の舞台はすべて江戸。こんな西尾史資料が稿本として遺されていたのだ！羽生水安著『随宜軒詩文稿』『賜大黒天貴筆因記』西尾市岩瀬文庫蔵）。そう云えば前掲②を描いたのも同じ万延元年であつたから、これでこの年二作目。いや、これ以外にも、さらに描いていたと考える方が自然だろう。そこで問題の自讃歌は次の通り。

しもつきの はつのねのひをまつりなは はれたちよりて ふくをあたいん

描いた十一月十一日は庚子、甲子ではないが、この年の十一月が戊子で、描くのをこの月と決めた以上、描くのも子の子の揃い、となれば、その子の日は初めの子の日の十一日（この月は二十三日が壬子の後の子の日）。描いた乗全の心の内を読み解けば、こんなところか。むろん子尽しの「大黒天図」ならば靈驗あらたか。これを祭れば福徳到来疑いなし、と悟したのが前掲歌。拝領した水安も、子の字尽しで子々孫々、これを祭るよう言い置いた。その羽生家の大黒天祭りの日が霜月子の日であつたのか否か、定かではないが、いずれにせよ乗全の大黒天信仰が半端ないものであつたのは明らかだろう。乗全の信仰と云えば、従来、立山信仰を上げるのが一般だが（福江充「松平乗全と立山信仰」前掲『新編西尾市史』別編一）、ここにもう一つ、大黒天もまた、それに劣らず篤く信仰されていた点を指摘しておきたい。

それに関連して注目すべき乗全の作があつた。大正三年のあの西尾町史料展で展示された「神農氏肖像（神農図）」である。出品したのは錦城町（わたしもかつてこの住人だった）の羽生道作すなわち水安の子孫と知れば興味も一入。言うまでもない、神農は人身牛首の中国古代の帝王。農業医業の祖として、とりわけ医家の尊宗を集めた。これまた乗全は水安の願いに応え描いたのだろう。「大

黒天図」同様、羽生家では、これを祭ったに違いない。

しかし、描いた乗全はどうか。もちろん神農に対する尊宗の気持ちは乗全にないわけではないだろう。だが乗全にとって「神農図」はあくまで数ある「道釈人物画」の一つ。いわば鑑賞絵画として描いた、と言え、言い過ぎだろうか。対する「大黒天図」の制作には乗全の信仰があつた。多数の「大黒天図」の存在は、乗全のその信仰心が並々ならぬのを物語る。

当然、子の歳、子の月、子の日は大黒天所縁として乗全には強く意識されたはずだ。その意識が時に乗全に心的負荷を与え、大黒天夢想へと繋がることもあつたのではないか。わたしは、①の「大黒天図」を夢見大黒天と推定する背景に、こんな乗全の心の動き、信仰があつたとみている。とは云えその子に所縁の日となれば、甲子に丙子、戊子に庚子と年間三十日は下らない。むろん、そのすべてで大黒天の夢を見たわけではないし、見たならば、それこそ不眠症になろうと云うもの。それに見たからと云って、すべて絵にするわけでもあるまい。では乗全の大黒天夢見がどうして七月二十七日であつたのか、またどうして描くに至ったのか。前者については、この日が大黒天に最も所縁の深い甲子の日だったからと答える他ない。しかし、この年の甲子の日は、既に述べたように正月二十四日、三月二十五日、五月二十六日、八月二十八日、十月二十九日、十二月三十日とあつたが、その中で何故七月二十七日であらねばならなかったのか、については正直不明、夢を見たのが、その日であつたから―まさしく偶発的事態である。

一方、後者については。その答えは簡単明瞭、夢に見た大黒天が描くに値するかたちであつたからだ。要するに類例ない姿と云うのである。となると、わたしたちが為すべきは、①のうちにそうした異例のかたちを探ることである。それが夢の痕跡と認められ、①が乗全夢見の「大黒天図」と云う他あるまい。そこで一点、プロの絵師の手にかかると、優れた「大黒天図」を紹介する（図4）。筆者は長澤蘆雪（二七五四―九九）。画面から溢れんばかりの量感表現にその異能ぶりを示すが、服装や被りものの、持物など「大黒天図」としての基準的図様を示す。となれば、①の図様の異例さを知るには、これと比較するに如くはない。蘆雪の大黒さまを篤とご覧あれ―次回への宿題だ（続く）。



図4 長澤蘆雪『大黒天図』

岩瀬文庫の史料の閲覧については、西尾市史編さん室の神尾愛子氏のご指示とご高配による。心よりお礼申し上げます。

ARTISTALK (アーティストトーク。) Vol. 1

聞き手 田中 裕紀乃

3

ARTISTALK は、地域の現代美術作家に学芸員がインタビュー形式で制作活動についてお話を伺っていく企画です。第一回のゲストは愛知県在住の美術作家であり、当館主催ワークショップ（八月二十三日（土）開催予定）で講師を務めていただく荒木由香里さんです。

— 荒木さんの作品は、まず素材を収集し、それらを色ごとに丁寧に分類するところから始まります。まるで儀式のように色を分けていく工程は、制作プロセスの重要な一部を成しているように感じられます。作品における色彩の役割についてお聞かせいただけますか？

A 素材を探し収集するところから制作は始まります。世の中の常識とは別に、私は自分の目で見て考えて世界や価値を知り判断したいと考えています。人間の目に映るものは、すべて何らかの色をもっていて、それは世界や本質を知るうえでとても重要な要素だと感じています。多様な色の中でも赤は特別な色だと思っています。とても大事な色。多くの国で特別な色。集まりやすい色でもあります。逆に緑、紫、オレンジは全然集まらないです。オレンジは特に集まらなくて。近年ようやくく集まり出したところです。今度大阪で個展（@大阪高島屋美術画廊ギャラリーNEXT二〇二五年五月二十八日〜六月九日）があるのでそこでは初めてページで作品を作りました。私はなるべくフラットな目線で色を集めて作品を作っているのですが、これがなかなか難しい。例えば多様な赤があるはずなのに、私が赤を集めるとなぜか全部同じ赤が集まってしまう。私にとってこれは結構事件で。それを踏まえて、単色のシリーズには私が思う赤じゃなくて、赤と表記されて売っているものだったり、誰かが赤だと思っていたものだったり、私が違うと思ってでもそれを取り入れるというルールに変えて、いろんな赤があるというのを確かめるために始めました。私の作品は色で別れているから心理テスト的な感じでみんな語ることが違うのがすごく面白い。私の場合はなぜかわからないけど、赤やピンクは私の場合とはきにすごく元氣いっぱいになります。目に鮮やかなものは心にいいんだなと思っています（笑）

— 荒木さんの作品は、カラフルで華やかな印象があります。ですが、作品をよく見てみると調理器具のざるや文房具のはさみなど、私たちの身の回りにある日用品が使われているのが分かります。これらの既製品はどのような基準で作品に取り入れていらつしやるのでしょうか？

A 骨董市で手に入れた珍しいもの、何かわからないけれど面白いと感じたものを取り入れることありませんが、なるべく見たことがあって用途が分かるもの、多くの人が使ったことがあるものを必ず取り入れるようにしています。私は既製品を素材として作品を制作しているの、それが「芸術」として昇華され、崇高なものになっていくことで、鑑賞者との間に距離ができてしまうのが嫌なんです。私の作品の中の既製品は、本来の用途から離れ、見慣れない角度で鑑賞者に提示されます。鑑賞者は、私の作品の中で思いがけない角度から既製品を見たとしても、すでにその使い方を知っています。だから、その素材である既製品について意識し、もともとの用途や既製品そのものについて思考を巡らせることができる。私は、その意識のやり取りみたいなものが作品を通してできるんじゃないかなと思っています。ひとつひとつの素材の、この形、この向きが美しいな、この素材の隣にあると面白い見え方するな、と素材が持ちうる最大限の可能性を探りながら組み合わせてるようにしています。そうすることで鑑賞者にとって、思いがけない角度からの「発見」となり、それが新しい視点として、日常的にその人の中に入っていく。そういったことを目指しています。

— 荒木さんは、多岐にわたるジャンルの中でも「彫刻」を選択されていますが、選択の理由をお伺いしてもいいですか？

A なんだらう。彫刻しかない、と思っていました。他の選択肢は全く視野になかったです。絵は好きでデッサンではできるけどあんまり描こうと思わない。彫刻でも、彫塑とか人体作るとかも楽しいなとは思いますが自分でやろうとは思わない。でも純粋に彫刻としての考え方や、ものを作るプロセスには共感しています。彫刻を制作する上での考え方は大事にして、素材としての既製品や手法としてのアッサンブラージュなどを取り入れて作品にしていくというのが私の制作スタイルです。

自然と導かれて最終的に選択することになったという感じですかね。

— 荒木さんの既製品を組み合わせて制作する制作手法は、絵画や彫刻とは異なる独自の性質を持っているように感じられます。ゼロからイチを生み出すというよりも既にある「イチ」を何十倍にも拡張していくような印象を受けるのですが、ご自身ではこの点をどのように捉えていますか？

A 私の中では既製品を使ってもゼロイチだという認識で、例えば絵の具であっても既製品だと思っています。石や木などの自然のものについても、もうすでにそこに在るものとして作品に組み込んでいます。そこを手を加えて違う形や色にします。それは既製品には適していないような気がしています。また既製品は同じ様に並べたとしても、もう既に何者かであって、かつ意味が付随するもの。それが既製品の特性だと思っています。私の中で既製品の魅力がそれぞれあって、圧倒的に素材として面白いと感じています。例えばどこで作られたプロダクトなのか、どういう歴史があったのか、シグラスなどどこから流れ着いたのかなど無限に物語がある。素材一つ取り上げただけでたくさんの要素が詰まっている。私はその魅力的な要素を引き出して、組み合わせでまた新しいものを作っていくことに興味があります。

— WSを開催すること、あるいはWSを通して初めて会う人々とのづくりの時間を共有するというところについてどのようなことを考えていますか？

A ルール／やり方を整え、参加者の自由度をより拡張する仕組みを意識しています。参加者は組み合わせて貼り合わせるだけ、など作業はなるべく単純にしています。参加者はそれぞれ組み合わせ方が多様で、その組み合わせを見ていると、とても刺激になります。その組み合わせはその人のもので、その人らしさがそこに現れます。WSはその発見に立ち合うことができるのでとても面白いです。WSに参加してくれたり、私の作品を見してくれた人が、新鮮で新しいもの、今まで知らなかった美しさに邂逅する、そんな衝撃を得る機会

を提供できれば、と思っています。

— 最後の質問です。ご自身の作品が社会にとってどんな役割を果たすことを期待しますか？

A 単色でまとめるシリーズを続けていると、タイムカプセルのように記録しているという感覚になります。それを美しくかつこよく美術作品として残していく。遠い未来まで作品がそのまま存在して発見されるとしたら、こういうアーティストがいて、こういう美しいものがあるのねって発見されて、そこからいろんな情報を収集できて、研究されて、と繋がっていくのって面白いなと思っています。

— 今回お話を伺って、八月二十三日のワークショップがますます楽しみになりました！貴重なお話をありがとうございました。

A ワークショップではまたよろしく願いいたします。ありがとうございます。

PROFILE

あらき ゆかり
三重県生まれ。名古屋芸術大学美術学部造形科造形選択コース卒業。現代美術作家。主に身の回りにある装飾品や日用品など様々な素材を組み合わせて再構成するアッサンブラージュという手法で作品を制作する。

EVENT INFORMATION



「でこでこでこぼこカップケーキを作ろう！」

岡崎市美術館は改修工事休館中のアウトリーチ展開事業として、館外でのワークショップを開催いたします。自分だけの特別で新しいカップケーキを是非一緒に作りましょう！

詳細はこちら

申し込みはこちら

連載

本多家の家臣団

5

〈本多忠勝の家臣団⑤〉

湯谷 翔悟



永禄九丙寅年 従家康公本多中務大輔忠勝江御附被遊候御家人

名	知行(石)	備考
都筑弥左衛門	3,000	後500石加増
長坂太郎左衛門	3,000	
松下三十郎	2,500	後1,000石加増 下野守へ付
梶金平	2,500	
河合又五郎	2,000	
山口加平次	2,000	■守へ付
三浦竹蔵	1,500	
松下久左衛門	1,500	
長坂血繼	1,500	
長坂甚平	1,500	
本多三弥左衛門	1,000	旗本復帰
福尾淡路	1,000	
多門伝十郎	1,000	
松下源五郎	1,000	
依田内蔵助	1,000	旗本復帰
大原作之右衛門	1,000	淡路守へ付
原田九郎左衛門	1,000	松下九郎左衛門事
向坂与五右衛門	800	後200石加増
大野吉右衛門	800	源三兵衛先祖
山本唯右衛門	800	出雲守へ付
大原物右衛門	800	出雲守へ付
桜井庄之助	700	旗本復帰
伊奈市左衛門	700	
勝屋甚五兵衛	500	
中根五助	500	
本多平三郎	500	
内藤平十郎	500	
大屋吉大夫	500	小隼人事
本多甚六	500	
植村庄蔵	500	与三郎先祖
渡辺半兵衛	400	旗本復帰
土屋甚助	400	
阿佐美清兵衛	300	
小野弥三郎	300	
植村土佐	300	
蜂須加彦助	250	
中村与惣	250	
日置小左衛門	250	
小泉孫八郎	250	
近藤八右衛門	200	
大兼彦市	100	
渡辺墨右衛門	記載なし	
小坂助六	記載なし	旗本復帰
江原与右衛門	記載なし	旗本復帰
新屋清右衛門	不明	
影山弥三郎	不明	
大原与右衛門	不明	
荒川甚太郎	不明	
小野田与市	不明	
二橋藤大夫	不明	
柴田五郎右衛門	不明	
下里藤八郎	不明	
松下七兵衛	不明	源之進先祖
永田覚左衛門	不明	
内藤源太左衛門	不明	

上記史料の御附人一覧

*太字が旗本に復帰を願った家
(都築は本多家を離れたがのちに再仕官)

〔承前〕家老級から一兵卒まで広範に存在した御附人であるが、「家康公の直臣」という矜持は全体に通底する意識であったようである。

本多家が桑名に転封した慶長六年（一六〇一）、御附人八人が本多家を離れ、旗本に復帰を主張するという大事件が発生した。中には都筑・梶・本多などの大身御附人も含まれている。なお、同様に旗本復帰を志向した事例は、井伊家の近藤や榊原家の中根・村上・原田など他家にも見られる。

こうした御附人から旗本への復帰は、独立した力を有する自律性の高い家に特有の事象とされるが、本多家の事例を見ると、そうとも言えない。都筑家伝来の史料（写真、当館蔵）に記載の御附人と知行高を見ると、慶長六年に本多家を離れようとした八人の知行には開きがある。この史料をどこまで信頼するかは慎重にならざるを得ないが、比較できる記述が、『寛政譜』の渡辺半兵衛真綱条にある。

渡辺真綱は永禄四・五年（一五六一・二）の三河一向一揆で家康に敵対し、その

後今川氏真に仕え、同一二年に再び家康方に復帰し、本多忠勝に附属された。その後天正三年（一五七五）長篠の戦いの軍功により、遠州植松村に二〇貫の知行を与えられたと記される。都筑氏が知行五〇〇貫を有するのとは大きな差がある。

『寛政譜』には続けて、本多忠勝が、慶長六年に真綱に二〇〇石の知行を与え、代わりに家康から与えられた二〇貫の知行を返上させたことを記している。真綱はこれに不満を抱き、二年後に息子の則綱を本多家に留めて、自分は三州浦部村に潜居したとある。知行二〇〇石というのは、家老級の大身御附人に匹敵する栄転である。一方で家康からの知行を返すということは、本多家の家臣になるということにほかならない。真綱にとっては大出世より、家康直臣であることが重要であったようである。表では渡辺半兵衛の知行が四〇〇石となっている。『寛政譜』の記述とどちらが正しいか判断できないが、いずれも正しいと仮定し、真綱が本多家を去ったのち、則綱に与えられた知行が四〇〇石だったとみることもできる。

筋の御奉公仕りたき旨を願ひ奉り候ところ、いずれも御許容にて、御旗本へ帰参仰せ付けられ」と、あたかも「円満退職」したように記されるが、実際はどうも違ったようである。慶長六年に本多家を離れた都筑・桜井などは、『寛政譜』では「故有りて」とのみ記し口を噤む。しかしいずれも一度蟄居などしており、即座に旗本となつてはいない。井伊家の近藤秀用も同様に記しており、この傾向は御附人に共通の状況であったようである。本多家を離れた桜井勝成も、『寛政譜』に「不義にてしりぞ」いたと本多忠政に言われたと記されている。そもそも御附人は、家康家臣団編成の一角であり、配属は家康の意向による。それに反対して旗本復帰を願うという以上、円満にいかなくて当然かもしれない。それでも御附人は家康直臣であることに拘った。

なお、慶長六年に旗本復帰を願った中で、梶金平だけは、家康の「思し召し」を請けて翻意し、本多家に残った。代わりに梶は「上意」により従五位下淡路守に叙任されている。これで梶は位階の上では、附属先の本多忠勝と並んだことになる。

（続）

研究紀要紹介

資料紹介…岡崎の刀匠筒井清兼

安本 翔音

本稿は令和五年度に寄贈を受けた、昭和期に活動していた岡崎の刀工である筒井清兼の資料群について記したものです。

筒井家は江戸時代から岡崎市材木町で続く鍛冶屋で、清兼は戦時中には市内戸崎町で県内の陸軍将校の軍刀を作り、戦後には戸崎町や長久手市で多くの刀を鍛刀し、晩年には、愛知県無形文化財にも指定されています。また、作った刀は、熱田神宮、猿投神社、伊賀八幡宮などにも奉納されています。

本資料群には、清兼の作った刀や鐔だけではなく、作刀時の道具や写真、衣装、押形帳、記録帳などが含まれます。刀は昭和十四年に清兼が刀展で初受賞したもので特別な思い入れを感じるものです。押形帳や記録帳は清兼が鍛刀した時の記録を長年書き記し、集めたもので、鍛刀の過程を追えるものとして貴重なものであるといえます。本稿では、主に記録帳の中身の分析を行いました。できあがった刀の感想や研師の評なども書かれており、刀鍛冶やその周囲の人々の想いが感じられるもので大変興味深いものです。

本稿の執筆に留まらず、今後も本資料群の調査・活用を図るとともに、市内や近隣の調査をより一層進めていきたいと思います。



筒井清兼画像

「こども学芸員」実施報告

山下 葵

昨年度の展覧会「QuizKnockと巡る江戸東京博物館展」の会期中に実施した「こども学芸員」は、小学四年生～六年生の子どもたちが学芸員のお仕事を体験するイベントで、岡崎市では初めての取り組みです。

こども学芸員に任命された子どもたちは、三日間にわたり美術博物館の役割や学芸員の仕事について体験しながら学びました。普段は見ることのできない美術博物館の裏側を見るバックヤードツアー、掛軸や巻物などの資料の取り扱いの体験、実際の展示ケースに資料を展示してみる体験など、多岐にわたる学芸員の仕事を体験するプログラムを実施しました。また、子どもたちは展示されている資料・作品からお気に入りのものやひとつを選び、それについて調べたことや気に入ったところなどを、実際に来館したお客様の前で発表するギャラリートークにも挑戦。参加した子どもたちは楽しみながら積極的に活動に取り組んでくれました。

本稿では、こども学芸員の詳細なプログラム内容だけでなく、ワークシートを使ったギャラリートーク準備の進め方や、開催後に実施した参加者本人と保護者へのアンケート結果の分析などをお話して、こども学芸員の活動内容を詳しく紹介していきます。なお、当館では今後、こども学芸員を実施していく予定です。



掛軸の取り扱いを体験する子どもたち

「ひらいて、むすんで展」トークイベント採録

今泉 岳大

昨年度開催した企画展「ひらいて、むすんで」(二〇二四年四月十三日～六月十六日)の関連事業として出展作家の手塚愛子氏と豊田市美術館学芸員の天野一夫氏を招いて実施したトークイベント「開いたり閉じたり」そして勇気について(2)」を採録したものです。

本展では当館収蔵品を含め、「ひらく」「むすぶ」という視点から絵画や彫刻、映像やインスタレーションなど二十二名の美術作家による作品を紹介しました。その中で、日本とドイツで活動する美術作家である手塚愛子氏は本展の核となる作家として、収蔵品を含め過去作から最新作を回顧的に展示しました。本トークイベントでは手塚氏の作品を長年見てこられた天野氏とともに、手塚氏のこれまでの活動を振り返りながら、作品について、また作品のキーワードから広がる文化や歴史、美や様式などについてお話いただきました。

手塚氏のアーティストとしての歩みとその視点から見ているもの、天野氏の学芸員・研究者としての視点や考え、そこにははつとずるものの見方や、体感としての美術の歴史、美に触れる感覚、そのリアリティが語られています。わたし自身、聞き手として登壇していたものの、本稿を書き起こす中で新たな気づきや学びがありました。



企画展『ひらいて、むすんで』関連イベント「開いたり閉じたり」そして勇気について(2)」岡崎市美術館1階セミナールームにて



【重要文化財】旧額田郡物産陳列所
2000年撮影。文化財指定直後に外壁を塗り直したばかりの姿。

額田郡物産陳列所は、一九一三年（大正二）の竣工である。同年に同じ岡崎町大字明大寺西浦（現在の岡崎市朝日町）の敷地内に正対して建てられた額田郡公会堂とともに、「岡崎の二大建築」として『建築画報（大正二年一月号）』に取りあげられており、当時としては珍しいスマートな物産陳列所として注目を浴びていた。愛知県知事松井茂の額田郡巡視先の一つにも、建築中の額田郡物産陳列所が含まれている。明治から大正にかけて全国的に建設された物産陳列所は、地域社会的な殖産振興を主目的とした施設であった。建物の特徴としては、採光を意識した内部空間とすること、公会堂と併設している場合が多いこと、公園内に建てられることなどがあげられる。これを踏まえると、額田郡内の農業・工業・商業をはじめとする産業の振興と発展のために設置された額田郡物産陳列所は、内部が間仕切りのない一室の空間から

額田郡物産陳列所

開所記念展覧会

伊藤 久美子



開所記念展覧会賞牌
中央に物産陳列所がデザインされている。直径5.5cm。

なり、天井下の壁に四葉状の採光窓を、妻壁にも明かり確保のため窓を配しており、施設の特徴をよく残していると言えよう。
額田郡物産陳列所では、郡内の物産や産業の発展に参考となる物品を陳列して公衆に観覧させることを目的とし、各種の陳列会、展覧会をおこなった。一九一五年四月一日から五月五日にかけては、物産陳列所開所記念としての展覧会が開催されている。その詳細を定めた「開所記念展覧会規則」によれば、出品者は額田郡内現住者に限り、出品物は生糸及び紡績糸、織物、石製品、金属製品、木竹製品の五項目、郡内産もしくは郡内現住者所有の工場で生産されたものに限り、とある。出品に対しては一等賞から三等賞、褒状の四種の褒賞が審査されて、展覧会開会翌日の一六日に行われた褒賞授与式で出品者に賞品と賞状が授与されている。写真の賞牌は、その際の記念品と推定されている銅製のメダルである。銅製なので三等賞のものなのか。ほかに関連資料が知られていないため、それは定かではない。

NEW FACE

今年度四月から美術博物館副館長に着任いたしました原林と申します。どうぞよろしくお願いたします。三十九年以上岡崎市の行政に携わってきましたが、美術に関する配属は、美術館で一年間配属されて以来で、美術館は初めてとなります。美術館は個人や団体主催による展示スペースの貸出ですが、美術博物館では貴重な収蔵品の展示や企画展の開催が主であり、配属する学芸員の創意工夫による企画で、当館収蔵品はもとより、全国にある貴重な美術品をお借りして実現することのできる展覧会などを開催し、市民の皆様にご覧いただく機会を提供しております。美術博物館は改修工事により現在閉館しておりますが、令和八年七月頃には再オープン予定です。今後とも市民に愛される美術博物館を目指してまいります。どうぞよろしくお願いたします。



原林 基昭



今年度から新しく美術博物館の学芸員に着任いたしました、井原凛と申します。どうぞよろしくお願いたします。生まれは福岡県ですが、転勤族だったため各地を転々としていました。岡崎には就活の時に初めて訪れた、岡崎初心者です。美味しいものが大好きなので、おすすめのお店があれば、ぜひ教えてください！
大学では主に江戸時代の日本絵画について学んでおり、特に浮絵や洋風画といった西洋からの影響が色濃く見られる日本絵画について研究していました。絵を見ることはもちろん、歌舞伎鑑賞も好きで、学生時代はお財布と相談しながら度々歌舞伎座に足を運んでいました。
まだまだ岡崎市に關しても学芸員としても新米で勉強中の身ではありますが、多くの人に岡崎市の魅力を伝えられるよう精進していきたいと思います。

井原 凛

工事通信

—モナリザの背景には山岳風景が描かれている—



みなさんは美術館や博物館を訪れた際には何をみますでしょうか。愚問でしたね。展示されている作品や資料に決まっています。ところが、最近私たちは違うところを意識して見ていました。床や壁です。意外と館によって色や素材に違いがあるのです。当館の展示室の床や壁の色は覚えていますか？覚えていた方はすごい。今回の工事では、展示室内の色が変わります。改修工事明けの展覧会では、あ、変わったんだ～とニタニタしながら見てみてくださいね。もちろん、展示品のついでで。

(安本)

開館しているときでさえ、具体的にどんな仕事をしているのか見えない私たち美術博物館の職員は、工事休館中であれはなおさらどんな仕事をしているのか外からはわかりにくい。今、美術博物館で働く私がどんな仕事をしているのかその一端を紹介したい。

現在準備真っ只中の仕事のひとつは八月二十三日（土）に康生町の NEKKO OKAZAKI で開催予定の「ここでこぼこカップケーキを作ろう」というイベントがある。これは休館中の当館が、街中に出向いて情報発信及び教育普及活動を行うアウトリーチ展開事業「とびだせ！びはく」の一環で、現代作家の荒木由香里氏を講師に招いてのワークショップである。荒木氏の制作手法であるアッサンブラージュ（寄せ集める、組み合わせることの意）という手法を参考にしたりオリジナルのカップケーキ型オブジェを制作するというものである。当館の認知向上に努めるとともに教育普及の場を提供することを目指した試みである。

今年から担当となった業務の一つに、本誌 ARCADIA の編集業務がある。実は前からやっていた仕事の一つで、念願かなって（？）担当となりうれしく思っている。この業務で最も難関なのは執筆者たちから期日内に原稿を集めることである。筆者はその中でも最も素行が悪く提出期限を守れない常習犯であったのでこれを機に改めたい。自分のことは棚に上げ、執筆者たちからは厳しく入稿の催促をしていきたい所存である。（笑）

また、大事な仕事の一つとして、収蔵作品の修復業務がある。岡崎市の財産である当館の収蔵作品を大切に保管し百年先の未来につなげていくための重要な業務である。普段の作品点検のなかで問題が発覚した作品を順番に修復していく。修復の業務は専門の修復家に依頼して行うのだが、この専門家を見つける作業もまた一苦勞である。収蔵品は多岐にわたっており、それぞれに専門家がいて適した専門家をみつけてくることから仕事が始まる。修復業務は作品によって業務内容が全く異なる。人間も不調を感じると医療機関に向き薬を処方してもらうように、作品もそれぞれの不調に合わせて専門家に処置してもらう。作品は人間と違って自ら不調を訴えてくれないので我々学芸員が普段の点検業務から不調に耳を澄ましていなければならないのである。（田中）

準備中のワークショップの
お申し込みはこちらから



今なにしているの？ その3

昨秋から始まった改修工事が延々と続いております。自身は勤続年数が長いので工事による休館は、今回で三度目になります。これまで工事進行中の館内で仕事をするとという困難さはたつぷりと経験させていただいたつもりでした。が、今回は単に、博物館内外にわたる大規模な工事というだけでなく、春冷えの最中の空調停止、大騒音に突然の爆音、微妙な揺れを感じ続ける振動、降雨の度に館内に雨漏りはないかの危惧など、普通にデスクワークをするにしてもこれは何かの苦行なのかと、モチベーションがダダさがりの環境下で過ごしています。

学芸員という展覧会とみられがちですが、自身は資料整理に重きを置いて従事してきたので、展覧会がない休館中に滞っている未整理資料を片付けるぞーと予定していましたが、そうは工事が許さない。工事の影響を受ける資料の大移動と保管、それに伴う収蔵庫環境の維持に四苦八苦、資料物品の移動ではほとすべての部屋は塞がれ資料を広げることすらままならぬ、それでもわずかなスペースで資料整理を挙行し、その間隙を縫って新収蔵品管理システム導入に向けてのデータ入力。旧岡崎市郷土館の担当も長かったもので、そちらに貯めこまれた先輩諸氏の遺産の見極め、工事終了後の資料の戻しと収蔵庫の復旧についても検討に入っています。加えて来春に収蔵ひな人形を活用してのひなまつりを館外で企画中です。

休館中ヒマしてるでしょ？と問いかける皆さま、工事進行中の美術博物館内での職場体験はいかがですか。お席を用意してお待ちしております。（伊藤）

表紙画像：荒木由香里《個展 Power to the color メインビジュアル》2025年 写真：尾崎芳弘（Daruma）